



## 四川省の自然遺産を訪ねる旅（2004年9月16日～22日）

校友会会長 長谷川良一

昨年中国では、「非典（サース）」が猛威をふるった。開けば昨年3月我々の団が上海に滞在していたとき、上海でもすでに流行が始まっていたそうだが、我々はそのことを何も知らず帰国した。そのこともあって第10回中国旅行は「非典」の行方を見極めるべく、例年実施の3月は見送り、夏休みは暑いので私の授業に差し支えない9月の中下旬に実施することに決まった。

昨年の段階では、映画「芙蓉鎮」に出てくる「米豆腐」を賞味すべく湖南省西部の湖西を旅行することを発表していたが、その後のリサーチで、目的地までのアプローチにあまり時間が掛かりすぎるといふことで断念した。私個人としては80年代の初めから九寨溝に行きたいと思っており、校友会の旅行でもそれを実現しようと思っていたが、3月では季節的に無理であった。ところが今年実施が9月であり、それに昨年秋にはその近くまで飛行機で行けることになったので、一も二もなく行き先を九寨溝に決めた。九寨溝の旅行では黄龍とのセットが定石であるが、すでに行ったことのある名和理事の話では、黄龍は年配者にはかなりきついのこと。そこで黄龍は割愛することにした。この旅を魅力的なものにすべく、和泉理事はインターネットから多量の資料をひきだしていろいろと研究してくださったが、コースはなかなか決まらず、最後には旅行社にすべてを任せることにした。こうして最終的に決まったのが、日中平和観光が提案した「九寨溝・神仙池・海螺溝・成都」コースであった。

朝、成田を発ち、北京で入国手続を済ませて成都で飛行機を乗り換え、50分の飛行機で海拔3500メートルの川主寺でバスに乗り換え、夜遅く到着した五つ星ホテル「九寨天堂」は、我々の度肝を抜く四川の山奥とも思えぬ中国ばなれした豪華なリゾート・ホテルであった。「人民中国」にも写真が紹介されているが、入り口を入った所には、一万平方メートルの広さの、白鳥の泳ぐ池の周囲に花木の植えられた、透明の大ドームに覆われた大きな花園があり、その奥には羌族の古民家群集落が再現されていた。ホテルの建物も外観は羌族の石造り風で、室内インテリアは羌族のデザインを加味したヨーロッパの豪華なリゾート風である。

第2日目は九寨溝の観光。中国の国内でも観光の目玉になっているらしく、金曜日だということにたいそうな人出、ガイドの王さんの話ではそれでも少ない方、メーデー・国慶節の1週間連休にはおびただしい人数が押しかけるといふ。九寨溝は秋の紅葉のすばらしさをのぞけば、散在する湖の色と滝が観ものであるが、雨天では細波のため湖の美しい色はよく観えないという、幸いその日は全ての湖を見終った後で少し雨に降られただけで、各所に点在するエメラルド・グリーン、紺青、ブルー、浅緑など、この世のものとも言えない美しい湖の色を堪能することができた。貴州省の黄果树の滝は東洋一と称されていて、私は実物を観てなるほどと感心していたが、珍珠灘の滝を目の前にしては、その壮大さは黄果树などの足元にも近づけない感じのたいそうな迫力であった。



2日目 熊猫海にて

第3日目は神仙池の観光。旅行社からあらかじめコースに入れられていたが、その実体は、前日のホテルの部屋に備えられていた案内書に「黄龍と九寨溝の美しさを兼ね備えた観光地」とあるのを見るまでは、まったく不明であった。私はその説明を読んで予期せぬ観光に期待の胸をふくらました。現地は九寨溝の北に位置し、10年の歳月をかけて道路を整備し、昨年10月に開放したばかりの処女地で、ほとんど人に知られておらず、そこを訪れた日本人としては二つ目の団だという。第2日目の観光とは打って変わって、山中には我々の団員以外には誰もいず静寂そのもので、食事や休憩の建物で台湾からの観光団に会うだけだった。名和理事によれば黄龍の規模の大きさには及ばないということだが、黄龍の呼び物である黄色い龍の様の流れも存在し、千枚田に似た蓮の葉状の池も間近に鑑賞することもできた。雨天であったが、その黄龍と千枚田の景観の鑑賞には何の妨げもなかった。ガイドはチベット族のハンサムな若者、今も耳に残るダーワの朗々たる歌声とともに、私にとってこの旅で一番印象に残る一日であった。

高地での旅行で一番恐ろしいのは高山病である。一日で海拔3500メートルの飛行場をへて海拔2000メートルの目的地に着くのであるから、果たして高山病の患者が二人発生した。一人はその夜の医者の手当てで大事にいたらなかったが、一人は病院に行って点滴を受け、成都に戻るのも危ぶまれるほどさだった。幸いその後回復に向かい成都まで戻れたが、大事をとってそのままホテルにとどまり、残念ながら後半のハイライトである海螺溝には参加できなかった。事務局の和泉理事はこの看病のため第2日目、第3日目の観光には参加できなかったが、我々老人組と違い若い彼のことであるから、今後も機会があるに違いない。

第4日目は一日かけて成都から海螺溝への移動であった。雅安、天全をへて磨西まで行き、バスを乗り換えて夜、海螺溝の金山飯店に到着した。晴れていれば翌朝金色に輝くミネヤ・コンカの峰が見えるはずだったが、小雨の中で残念ながら見ることは出来なかった。予定では第5日目の午前はロープウェイで上って氷河の見学、午後は温泉だったが、ロープウェイは検査で停電、仕方なく午前は有志だけでの温泉行き。一同はそれぞれ温度の違う露天風呂を梯子して楽しんでいたが、私だけは風邪気味だったので、一番温度の低いプールに初めから終わりまで漬かって身体を温めていた。午後はいろいろと議論があって、結局、全員橋(加)で氷河観光に出かけることに決定したが、結果的には登山の途中、左手に氷河の流れを見続けることが出来たし、直接氷河の傍までそのまま行くことが出来て、ロープウェイで登るよりは好都合だった。私は86年の夏ラサから成都への機上から氷河を眺めたことがあるが、この足で氷河の上に立てたことは感激だった。目の前には何億年もかけて削り取られた高さ180メートルの壮大な花崗岩の壁が聳えていた。何でもこの氷河は中国国内同じ緯度の氷河で最も海拔の低いところに存在するものであるということである。その夜泊まった磨西の氷川飯店は、都会のホテルを思わせる瀟洒なものであった。

長征で名高い泸定橋、50年代に熱唱した「歌唱二郎山」「康定情歌」の歌の舞台の傍まで、50年後の今、行けるなんて誰が想像しただろう。二郎山のトンネルの前にはその歌碑が建てられて、その前で58年倉石中国語講習会で学んだ横山義一さんは、その一番上手に歌って拍手をとり、私はその歌の入ったテープを記念品としてダビングして全員に贈呈すると約束した。最近中国語を始めた人がそのテープを聞き、5、60年代に生まれた歌のすばらしさの一端でもわかって頂ければ有り難いものである。中国では日本の年度末に代わり、国慶節を目標に土木工事を完成させるのが常だそうだが、まさにその季節、途中、道路工事で片側通行のために二時間も待たされたが、それはそれで、道端でゆでピーナッツ、焼きトウモロコシ、豆花など賞味し、売りにきた胡桃、栗を買い込み、その売り手と必死に会話して意思を通じさせるなど、普通のツアーでは味わえない喜びもあった。帰国当日の午前は自由行動をやめて全員で武侯祠、杜甫草堂の見学。

泊まったホテルは金山飯店を除き、九寨溝天堂ほど豪華でなかったにしろ、どれもすばらしいホテルだったし、食事も文化のない山中のホテルなので、歴史のある安徽省南部ほどではなかったが、九寨溝天堂の特別料理では珍しいチベット族・羌族の料理が味わえ、最後の夜成都では、有名な成都の小吃のほとんどが卓上に出た、きめ細かな味付けの数々の成都料理を賞味することが出来た。更に最後の宴席が中国旅行社の手違いから二つの部屋に別れざるを得なかったお詫びとして、帰国当日の昼にも陳麻婆豆腐店で、東坡肉の味付けに似た名品、「一品肉」を初めとする当店自慢の料理の数々をご馳走になった。

私にとって今年の旅行は団長として最後のものではあったが、日中平和観光のコース提供、添乗の池田さん、中国側の王さん、事務局の和泉理事の働き、団員全員の協力のおかげで、実り多い、楽しい旅になったことを、心からお礼申し上げる。

最後に日中学院校友会中国旅行は、来年以降も団長交代で続けられるので、私同様皆様の支持をお願いします。  
(2004年9月25日)